

Die Eiche

ディ アイヘ
<http://www.jdg-chiba.com>

Japanisch-Deutsche Gesellschaft der Präfektur Chiba

〒270-2214 松戸市松飛台556-12
Tel./Fax: 047-385-1456

Mail: info@jdg-chiba.com



協会Home Page

2024年第30回ドイツ軍人慰霊祭

— 慰霊祭を通じて世界の平和を願う —

常任理事 坂田 博

第30回目となりました今回の慰霊祭は、11月17日、晩秋とは思えない20℃を超える快晴の下、一般参列者を含め、150名以上の関係者が集い、植松事務局長の開会の辞の発声とともに、盛大に行われました。一時参加を自粛されておりました川谷理事長を代表とする習志野第9合唱団18名や、御園生校長も列席されました。山岡先生が率いる津田沼高等学校オーケストラ部48名が、冒頭のドイツ国家斉唱から追悼曲が流れる献花まで、この式典を最後まで大いに盛り上げる役割を演じておりました。



来賓として、ドイツ関係として、ドイツ大使館よりマルティン・フォート首席公使、ラルフ・ベルズツケ駐在武官を含め5名の他、本国より習志野空挺団に短期研修で滞在中のドイツ軍将校3名も参列されました。地元関係機関より、千葉県より総合企画部国際課明珍課長他1名、船橋市より杉田副市長、習志野市より遠藤副市長他1名に加え、沢山の地元関係者の皆様も参列いただきました。さらに、式典進行に全面的に支援をいただいております自衛隊より第1空挺団習志野駐屯地田中第1科長、伊藤第3科訓練幹部、新井広報班長の参加をいただきました。



式典の冒頭、木戸会長が、「本慰霊祭の開催にあたり、尽力をいただいた関係者の皆様への感謝や御礼を申し上げると同時に、本慰霊祭を通して日独友好関係をより一層深められることを祈念する」という趣旨の追悼・慰霊の辞を述べられました。



マルティン・フォート首席公使が、引き続き、ご挨拶。「毎年、ドイツ国内においても、11月に軍人慰霊祭を行っている。特に、今年は第1次世界大戦開戦110周年という特別な年である。そのような悲惨な歴史を繰り返させないという意味での軍人慰霊祭は極めて重要であり、日独合同で行い、30周年を迎える特別な本式典は、過去の記憶を風化させないためにも継続が求められる。」と述べられた他、津田沼高等学校オーケストラ部や習志野第9合唱団の皆様にも謝辞の言葉がありました。



千葉県、船橋市、習志野市の各代表よりの温かいご挨拶を受けた後、本名海上自衛隊1等海佐（当協会会員）より、墓下に眠る30名の御霊全員の氏名の読みあげを行い、献花に移りました。

御霊への追悼曲が流れる中、マーティン・フォート首席公使による大花輪の献呈を始めとして、150名を超える参列者全員が慰霊碑の前に白菊をささげ、30名のご冥福を祈りました。

場所を自衛隊習志野駐屯地内に移して行われました直会がおこなわれました。これまでは、慰霊祭の開始前に、協会メンバーで直会会場の整えを行っていましたが、今回は、新井広報班長のもと、団員の皆様が前日より会場設営を準備、ほぼ完了されておりました。第1空挺団のご支援・ご尽力に深く感謝申し上げます。



直会には、50名強の参加者があり、木戸会長の開会挨拶から始まりました。まず、無事滞りなく終了しました慰霊祭に対する謝辞を出席の皆様へ述べられた後、「日本とドイツの友好関係は、1861年の日独修好通商条約から始まり、一時的な敵対関係はあったものの、160余年に渡り、連綿と今日にいたるまで継続しております。この関係が深まっていくことを望む。」と締められました。



フォート首席公使からは、「欧州各地でも毎年、軍人戦没者慰霊祭が行われ、戦争を止めようという発言がそのたびに発せられますが、現実には、未だ至る所で戦争が継続しております。そのような状況下、今回、ドイツ兵慰霊碑の隣に日本軍人の慰霊碑があることを聞き及び、来年以降、その慰霊碑にも献花を用意し、独日友好をさらに深めていきたい。」との言葉がありました。



現在3名のドイツ軍人の短期研修を受け入れている田中保和第1空挺団2等陸佐第1科長から、「世界が混沌としている今、国同士の相互理解が平和への道と認識しており、ドイツ軍を含め、防衛外交を通して、友好・平和のために引き続き、努力していきたい。」との言葉をいただきました。

その後、当協会会員遠藤英明氏の献杯、参加者の交流を図り、筆者の締めの辞、記念撮影を以って、30回目の慰霊祭は終了いたしました。

今回の慰霊祭で、フォート首席公使の発言の中に、「敵も長き友になれる」ということを証明しているのが、この地で継続して行われている日独共催の慰霊祭という言葉がございました。世界各地に至るまで国同士、民族同士の戦争や紛争が拡大している今、この慰霊祭継続の意義・重要性をより一層、認識した第30回の祭典と言えます。



Düsseldorf 奨学生歓迎会 に参加して 会員 風間 康宏

去る10月22日、昨年に引き続き、STIFTUNG "Studentenfonds Düsseldorf-Japan" (デュッセルドルフ独日奨学財団) 主催の "Japan Erleben" (日本体験) のため来日した奨学生をお迎えし、歓迎懇親会が実施されました。

新型コロナが落ち着きを見せた昨年から復活したこの懇親会ですが、今年は、デュッセルドルフ市からの6名の奨学生 (アウバハ・ティムさん、フロイデンライヒ・ヴィンセントさん、ゴモルカ・ロザリーさん、フック・マヌエルさん、リハマン・カルメンさん、シュトックシュレダー・アレクサンドラさん)、引率責任者で独日文化交流育英会・独日協会アム・ニーダーラインに所属されているマイト・ピア智子さんのほか、船橋商工会議所、在日ドイツ商工会議所及び千葉県国際交流推進室の方々をもお招きし、当会会員で皆さんの来日を歓迎いたしました。

私は今年4月に入会したこともあり、この懇親会への参加は初めてでしたが、昨年までデュッセルドルフ市に滞在していたこともあり、参加できるのを大変楽しみにしておりました。

懇親会は、植松事務局長の司会進行の下、木戸会長からの歓迎の挨拶、笹生理事の乾杯の発声によって幕が開け、その後は、日本語、ドイツ語、英語が終始飛び交いながら、皆さん、お食事や歓談を楽しんでおられました。

奨学生の皆さんは、来日に向け日本語を練習してくださっていたようで、バックグラウンドや日本でやってみたくいことなどを含め、流暢な日本語で自己紹介をしてくださりました。

歓談中、奨学生の皆さんは、やはりテーブルに並んだ数々の日本料理ですら大変興味深かったようで、一つ一つ味わって食べられている様子がとても印象的でした。私たちとしても、せっかく日本に来てくださった皆さんには日本を堪能していただきたく、日本の食事や観光地につき話したり、はたまた私たちが聞きたいドイツの話で盛り上がるなど、本当に楽しい時間を過ごすことができました。

楽しい時間はあっという間に過ぎてしまい、気付けば懇親会は終盤に差し掛かっていましたが、ここでは、昨年同様、植松事務局長から、各奨学生に対し、それぞれの名前を漢字で記載した色紙がプレゼントされました。

奨学生の皆さんとしても、漢字で書かれた自身の名前は新鮮だったようで、各漢字の持つ意味など、大変興味深そうに説明を聞いていらっしゃいました。

また、最後には、奨学生の皆さんからも、参加者全員に対し、ドイツから持参いただいたお土産を頂戴し、私を含む当会会員としても、大変感激でした。

今年も大盛況に終わったこの懇親会ですが、デュッセルドルフ市と姉妹提携を結ぶ千葉県ならではの行事といえ、ぜひ来年も奨学生の皆さんを心より歓迎し、日独の交流が更に深まることを心より願っております。



木戸会長の歓迎挨拶



漢字で表記された名前



Deutsch-Japanische Partnerschaftstage im Oktoberに参加して 理事 山本 久瑠実

10月10日から12日までベルリンにて開催された、日独パートナーシップデイズ2024に参加しましたのでご報告いたします。これは、独日協会連合会 (VDJG) と全国日独協会連合 (VJDG) の企画による日独・独日協会会員の交流イベントであり、これまで2005年から2018年まで日独で計4回開催され、5回目の今回はベルリン日独センター (JDZB) がメイン会場として据えられました。また今回は、前回成果文書である金沢宣言の内容を踏まえ若年層への支援制度が設けられたため、(財)日独協会にご支援いただくと共に、他の日独協会青少年会員と渡航前から交流しながら参加させていただくことができました。

プログラムのメインである、Barcampと呼ばれる意見交換ワークショップの中で印象的だったのは、参加者から多くの声が上がった、交流プラットフォームの立ち上げについてです。前回の金沢会議でもその必要性が宣言に盛り込まれており、また本協会にも広報運用のために日夜労力を割いて下さる方がたくさんいます。テクノロジーの力を借りながら、少しずつでも協会の発信力を高められたらいいなと感じました。

このほかにも、有識者によるパネルディスカッション、キャリアフォーラム、音楽演奏をはじめとする芸術セッションなどが全日程を通して隙間なく組み込まれ、1日目の夜には日本大使館で、2日目にはミッテ地区の「サムライ・ミュージアム」でレセプションや交流イベントがあり、互いの

文化を楽しみつつ、他の参加者と交流を深めることができました。情熱ある方々との交流で刺激を受けたことはもちろん、伝統ある「慰霊祭」を担う本協会のユニークさも再認識することができました。

今回の参加にあたり、木戸会長、植松事務局長、本橋常任理事、そして本協会の理事でありイベント事務局の大野巨様 (現地で大変ご活躍をされていました…!) には大変お世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。



独日協会メンバーと筆者



各協会の活動を紹介するポスター



いちかわドイツデー 2024 開催報告 顧問 志賀 久徳

今年も10月5日の土曜日に「いちかわドイツデー2024」がニッケコルトンプラザにて開催され、当協会も例年通り後援団体としてパネル展示を行いました。

このイベントは、2004年から市川市のパートナーシティであるローゼンハイム市(バイエルン州)との交流の一環として毎年開催され、食や音楽などを通じてドイツの文化を紹介するものです。

当日はドイツビール、ソーセージ、ワイン等の飲食物や雑貨のお店の他、アルプス音楽隊による歌と演奏によりドイツムードに包まれ、雨天にもかかわらず大盛況でした。

当協会も説明パネルに写真を展示し、協会案内書、Die Eiche等も準備して、会長夫妻をはじめ主として運営委員にて多数の来場者を迎えました。

会場では多くの方々から、当協会に対して活動や入会方法等の質問をいただき、当日の入会者もあり、改めてドイツに対する関心の高さを感じました。

主催者側からは来年もよろしくとのコメントをいただき、イベントは予定通り終了しました。

次年度も同じ時期に開催される予定ですので、皆様のご来場をお待ちしています。

(顧問 志賀 久徳)



市川市のHPより引用



アルプス音楽隊の演奏



会長によるパネル説明

新入会員紹介 (片山 麻里)

4歳からピアノを習い、ベートーベンが1番好きと感じていました。ケストナーの児童文学や高橋健二氏訳のグリム童話も多く読みました。しかし、ドイツやドイツ語は特に意識しませんでした。

上の息子がドイツに留学し友人が我が家に泊まりに来たり、私が息子をドイツに訪ねたりし、初めてドイツ語を勉強しようという気持ちが沸きました。(実は、息子は留学前に植松アネットさんからドイツ語会話をご指導いただきました。現在、私の勤務先の松戸市国際交流協会でも講師をされています。)

千葉日独協会は、植松健さんから職場に送られて来るweb版のDie Eicheで知りました。草本晶先生の講演会に参加し、気付けば申込書を出していました。(同席した武井曜子さんの「一緒に今日入りましょう!」の力です。)

とても親しみやすい雰囲気と驚く一方、活動範囲の広さや会報誌で拝見する深い内容に圧倒されていますが、ドイツを愛する皆様とのご縁に感謝しています。どうぞよろしくお願いたします。



ドイツビールとの劇的な出会い



ドイツと私 **バイエルンストーベ祖父江さん**

ドイツ語を専攻するわけでもサッカーが好きでもなかった私がなぜドイツに魅了されドイツ料理店を営むまでになったのか？

2006年、当時の自分は週末になると静寂とはほど遠いバーを渡り歩き、朝までひたすらビールを飲むという生活をしていました。その中で今の店を共同で経営する事となるStraussと出会い意気投合し、当時六本木にあった老舗のドイツ料理店ベルズバーBERND'S BARで人生初のWeissbierに衝撃を受けたのがきっかけでした。

4大メーカーが出すピルスナーが全てであった自分の前に現れたWeissbier。会員の方にWeissbierの説明は不要かと思えますので省かせて頂きますが、私の知るビールとは大きくかけ離れたその存在は自分の中の価値観を書き換え、それからはStraussとドイツビール、特にWeissbierを求め都内をさまよう事が多くなり、彼の語るドイツの文化や生活にも興味を抱くようになりました。そして2008年ドイツへ。

Straussが研修の為ドイツに半年間滞在する事となり彼の飼っていた犬の渡航と帰国の為の事前手続きと、2か月近くかかるその手続きを待たずドイツに行かざるを得なかった彼の代わりに犬をドイツまで連れて行く役目を任されていたはずが、最終的には自分も4か月程ドイツに滞在する事に。

初めて触れたドイツ語は一言で言うと意味不明。Der Die Das? なんだそれは? という感じでしたが、それでも最終的に簡単な会話ができるようになっていたのは、日本から持っていった参考書と電子辞書、Nürnbergで通った語学学校と週5で訪れた地元のバーで飲むWeissbierのおかげかと思えます。

ドイツと私を考える時、自分の中では切り離せないのがWeissbierでありBier。自宅で夕食を終え、三々五々Kneipeに集まる人々。テーブルに無造作に置かれた新聞の記事に文句を言い、それに賛同する人や反論する人。政治だったり税金だったり当然サッカーだったり。とりとめのない話題で盛り上がるその空間に欠かせないBierは彼らドイツ人にとってお茶やコーヒーに近いものなんだと理解するのには時間ばかりかかっていました。ビール=お酒=特別なもの、という文化を持つ日本ではなかなか難しいかもしれませんが、縁あって船橋で「Bayernstube」というドイツ料理店をやる以上は、いつかそういった文化や空気を作り出す事が理想であり、またそれを目標として日々頑張っていきたいと思っております。



滞在した村のMaibaum (5月の木)



Nürnbergのビアガーデン 語学学校の同級生と筆者 (最前列左)



ドイツに導いてくれた同僚Straussの愛犬トビー



ドイツの街紹介

Ulm近郊の小さな町、Blaubeuren

顧問 志賀 久徳

数年前にドイツ国内をドライブ旅した時、今から約40年前に、ドイツ駐在員としての語学準備のために約1か月間通ったことのあるゲーテ語学学校のあった、ドイツ南部の小さな町のブラウボイレン(Blaubeuren)に立ち寄りました。

まず、ミュンヘンから西へ150K余りにあるドナウ川沿いのウルム(Ulm)まで行き、世界一高い塔を持つ大聖堂、壁画で飾られた市庁舎、そして、物理学者のアインシュタイン生誕の町の駅前モニュメント等を見学し、一泊して、ウルムから西方へ車で約30分のところにある、小都市ブラウボイレンを目指しました。

昔はこの町にゲーテインスティテュート(分校)があり、その頃の日本は経済大国と言われて海外進出も盛んであったため、このような田舎町の学校にも金融、メーカー他の日本人社員が同じクラスに3人も通っていました。

まだ、大手航空会社もアンカレッジで給油して再度ドイツへ向かう時代で、メールも携帯電話もなく電話代は高額であったため、この地は超多忙な日本から隔離された別世界にきた感じでした。

初対面の3人は別々の民家の間借りで外食が主体の生活でしたがすぐに親しくなり、不安な中にも楽しかったことを思い出します。

7月の語学学校の初級クラスには30名程度が世界各国から集まり、外国の人は最初からドイツ語らしき言葉をしゃべりまくる中、シャイな我々日本人は、ドイツは英語でビジネスは大丈夫という安易な気持ちもあり、黙って授業を聞いていました。

この町でのドイツの初体験は、小さなレストランでビールを注文すると、暫く出てこないのドイツ語が通じていないと思い厨房まで見に行くと、ジョッキの泡が収まるまで何回も待つてつぎ足していたことや、美味しい朝食のパン(プレートヘン)は丸くて硬くナイフで切って食べ、公園の青リンゴは自由に取れ、また、列車の駅には改札がなくポストは黄色いこと等、日本との違いに驚かされたことでした。

久しぶりにこの町を訪れた時に、雑貨屋さんでゲーテ校の場所を尋ねたところ、かなり前に廃校になったとのことで、時代の変化を感じました。

ただし、町の様子は大きくは変わってなくて、木組みの家々、街の外れにあるブラウトプフ Blautopf(青い壺)という天然の泉や、小川の水車小屋、公園の緑、小さな列車の駅等は未だ中世の街並みが残っており、静かな山間の街を隅まで散策しました。

その日は小さなホテルに泊まり、ドイツ料理とワインを注文し、当時の余韻に浸りました。

日本とは違い、分散都市型のドイツには、小さな町でも一定の都市機能が充実しており、豊かで魅力がいっぱいの地方の町が存在しているようです。



Ulmの大聖堂



Ulmの歴史ある市庁舎



Blaubeurenの街



Blaubeuren中心地



市庁舎前にて



水車小屋の近く



宿泊ホテル前

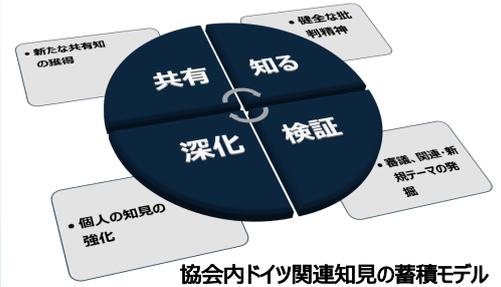
青壮年部の活動の狙い

2024年度の青壮年部の活動の内容をこれまでほぼ毎号紹介してきました。今回、活動の中でもドイツ歴史研究会とドイツ時事問題懇談会にフォーカスして活動の意図するところをご紹介したいと思います。

「ドイツが好きだ」、「ドイツに関心がある」、何らかのドイツやドイツ語圏、さらにはドイツを取り巻く欧州に関心をお持ちの方がこの協会には多くおられるかと思えます。同時に会員の皆様には、専門性を豊かに持ちの方々も少なくおられると伺っています。

この活動では、あるテーマについて個人がすでにお持ちの知識、持っていないくても知りえた知識を懇談形式で紹介しながら、協会の中における知識から共有の知識に発展、そこから新たなテーマ発見や共有する課題を連続的に生み出す循環的な活動を意図しています。

ここでは、仮に持ち寄った話題が断片的であっても、不正確であってもかまわないと思っています。理由は、活動を背景には「健全な批判精神」とよく申し上げていますが、談話会の中で激を飛ばして熱い議論をしているわけではありません。循環活動



なので批判的な捉え方といっても大きくは、「表層的か深いか」「正しいか、違うか」「別の視点で興味深いテーマと連携できそうか」「全く違うテーマがある」など他のメンバーが持ち寄った情報から気づくことができます。その場合、メンバーは、それぞれ無理のない範囲でさらに具体的、関連事項、正確な情報を別の機会に共有すればよいだけです。すると、エビデンスをもとにメンバー間の知見が更新、深化します。このサイクルの繰り返しで協会内のドイツ歴史、ドイツ時事についての共通知見が継続的に組織内で共有。結果、ドイツに関する豊富な情報、その背景を得ながら、協会内外の組織と交流の質を高めることができると思っています。

具体的には、ドイツ歴史研究においては、Preußenの人物歴史の過去の内部講演をきっかけにして、ドイツ東方政策、大ドイツ・小ドイツ主義の生成プロセス過程、ドイツ騎士団時代のポーランドなどなど、メンバー共有の文献と一緒に知見を進める動きとメンバー個人が関心あるテーマを宣言して適宜紹介、それらの活動からさらに次の発見を繰り返す。その動きが始まりました。

ドイツ時事も前回は、ドイツとイスラエルの関係、パレスチナ問題をテーマにあげました。同様の検討サイクルをイメージしてテーマの発掘を検討組織で行います。ドイツ語文献も扱いますが、言語は、副次的な位置づけです。昨今は、AI翻訳も使えます。言語非依存で検討することもできると思っています。和気あいあいと気楽に隙間時間で見つけた知見を組織で共有、そこから発展。この検討サイクルが自然と循環することがまずは、現在すすめているドイツ歴史研究会とドイツ時事問題懇談会の成功のポイントと思っています。どなたでも参加できます。手ぶらでも参加できます。ご関心おありの方は、青壮年部 勝見 (siegmond2017@outlook.com) までご連絡くださいませ。お待ちしております。その他、「音楽を聴こう！」活動、リアルな演奏会場でそれぞれ音楽に堪能するような活動も行っています。

(常任理事/青壮年部長 勝見浩明)

今後の予定

- 新春講演会 (詳細は、同封のご案内をご覧ください)
 - 日時 2025年3月1日 (土) 15:30~ (予定)
 - 講演者 相澤啓一氏
 - 獨協大学外国語学部特任教授
 - テーマ 日独文化交流の課題 (仮題)

会員情報

法人会員 医療法人 同和会 千葉病院、社会福祉法人清和会、(株)京葉ビル管理、(株)和幸電気工事、バイエルンストゥーベ by ダンケ

編集後記

協会の会員の活動の方向性は、木戸会長が明確に示された、「当協会の会員になってよかったと感じる (Die Eiche No.149) 」点です。運営と会員との接点は、突き詰めると協会活動を通じた交流体験と情報提供の2点と捉えることができます。各種イベントは、この活動を熱心に推進するメンバー、情報による接点強化の活動 (青壮年部活動など) を展開中です。鋭意、各自の個性を生かして活動しています。勿論、運営側で独善的に自己満足になってはいけません。皆様のご意見、リクエストを活動のエネルギーとしてこれからも活動にしたいと思っています。(勝見)